
暁万歳！！

リボーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁万歳！！

【Nコード】

N3220V

【作者名】

リボーン

【あらすじ】

暁が好きな主人公が、能力をもらってNARUTOに転生します。ご都合主義、不定期更新ですが、よろしくお願いします。

最初に（前書き）

楽しんでくれたら幸いです。

最初に

いつもと同じ学校帰り、俺は友達とNARUTOについて話していた。

「やっぱりNARUTOは面白いな。特に俺はダリイが好きだな。」

「皆そう言うヒーローキャラが好きなんだよね。俺としては暁のほうがかっこいいと思うのに。」

「はは、お前はいつもそう言うよな。」

いつもと変わらない会話。ただ、その日違ったことはその後俺がトラックに跳ねられたことだ。痛みは感じなかった。そして、俺の意識はなくなった……。

……目が覚めたら、そこには何もなかった……。ここはどこだ？

『ここは輪廻のはずれだよ。』

声がしたので振り返ると、そこには一人の青年がいた。

「あんた誰だ？」

『僕はここの管理人だよ。ここは死んだ魂の行き先を決める場所なんだ。』

「そっぴや俺は死んだんだな。俺はどこに行くんだ？地獄か？天国か？」

『いや、君には転生してもらっよ。』

「……何で？」マジ何で？

『君の死は本来なかったんだ。でも、たまにこういうことが起きるんだ。だから、ぶっちゃけ、帳尻合わせなんだ。』

「そういうことか。」

『理解が早くて助かるよ。代償として、転生先と能力をあげるよ。何かある？』

「ならNARUTOに転生したい。能力は水・風・雷を完璧に使えること、この三つを合わせてオリジナル血継淘汰・暴遁ほうとんが使えること、体術はガイと同じくらいで、レポートが使えること、チャクラはナルトの十倍で、口寄せでトリコのエンペラークロウを使えること、感知ができることをお願いします。」

『了解。後、年齢や容姿はどうする？』

「年齢は原作開始のとき18歳で、容姿はロザリオとバンパイアの東方不敗をお願いします。」

『OK。おまけとして人の死に慣れていることにしてあげる。それじゃ、そろそろ転生してもらっよ。第二の人生、楽しんできてね。』

こうして俺の新しい人生は幕をあげた……………。

転生して（前書き）

ここで主人公の名前を出します。

転生して

気がつくと森の中にいた。どうやら転生したらしい。しかし……

「ここどこだ？」

ここかどこの森なのか俺には分からない。しかし俺は感知タイプにしてもらったので、さっそく感知を始めた。

「ここから約300メートル先に5人。チャクラを感じないから一般人か……」

忍だと厄介だからよかった。さっそく会って聞いてみると、ここは湯の国らしい。原作では飛段の出身地だ。その後俺はテレポートのマーキングを行った。俺のテレポートは俺を中心に半径100メートル以内は自由に移動できるが、長距離になるとマーキングしたところにしか移動できないらしい。便利なものには制約もあるもんだ。

それから4ヶ月後、俺は暁に入った。この間俺は山賊や抜け忍を殺して経験を積んでいた。そんなある日、目の前にゼツが現れた。

「君強いね。暁に入らないかい？」

「暁？何だそれ？」知っているがとぼけた。

「アル目的カラ強い奴ヲ集メテイル。オ前ハ強いカラ勧誘ニキタ。」

「ふーん……俺としては行動を制限されたり、誰かに仕えたりし

ないなら構わないぞ。」「こんなこと言ってるが、内心うれしくてたまらない。前世から望んでいたことが実現した。」

「ソレナラ問題無い。」

「そうか、俺は羅刹だ。よろしくな。」

その後俺はすぐに他のメンバーと顔を合わせた。

「お前にはこの『雲』の指輪を渡す。」俺はペインから指輪を渡された。

「曉って基本何すんだ？」

「俺たちの目的は尾獣を集めることだが、今は資金稼ぎをしてもらう。」そう言われ、ビンゴ・ブックを渡された。

「曉は基本二人組ツーマンセルで行動する。お前はしばらくゼツと行動しろ。」

「了解。よろしくなゼツ。」正直一人がよかったが仕方ないな。

「アア」

「こちらこそよろしく。」

それから半年、ゼツとともに賞金首を殺しまくっていると、木の葉崩しが起こった。

「イタチと鬼鮫は木の葉に向かえ。」

「あ、俺も行きたい。」

「何故だ羅刹？」

「木の葉には俺のマーキングつけてないし、五大国最強の里と言われる木の葉を見ておきたい。」

「そうか。では一緒に行け。」

「よろしくなイタチ、鬼鯨。」

「ああ」

「ええこちらこそ」

そして木の葉につくと、すでに木の葉崩しは終わっていた。

「とりあえず壊滅は免れたものの被害は甚大のようですね。」

「栄華を極めたあの里が・・・哀れだな。」

「何だイタチ、あんたでも里に未練があるのか？」

「いいや・・・まるで無いよ。」

原作に介入うー。これから暴れるか・・・

「久しぶりの帰郷でしょう・・・どうです？探し物の前に茶でも・・・」

「・・・ああ・・・いいだろう・・・」

「俺はいいや。先にマーキングをしておきたい。後で合流するから先行ってて。」

「やれやれ、捕まらないで下さいよ。」

「そんなへましねーよ。」

二人と別れた後、俺は里じゅうにマーキングを行った。そして、木の葉と言ったら一樂。

「へい。味噌ラーメンお待ち!」

さつそく食べてみたがめっちゃくちやうまい!!!ナルトが好きなのもよくわかる。

「おっちゃん!俺にも一つ!!」

そんなことを思っているとほんとに来た!!びつくりしたらむせた!!!!

「げっほげほ・・・」

「大丈夫かにーちゃん?」

「ごめんごめん、ありがとね。」

そして、ナルトとラーメン食べてたら自来也が来た。

「聞いた通り来てみりゃ・・・ほんとにラーメンばかり!!!???」

自来也がめちゃくちゃ驚いてる。そりゃそうか・・・

「まさかもう来るとはのお、暁。ナルト、こっちへ来い。」

「何だ、君がナルトだったのか。まあまだいいか。」

俺はそのまま代金を払い行こうとしたが、自来也が立ちふさがった。

「どこへ行く、暁？」

「おいおい、人を組織名で呼ぶなよ。俺は羅刹だ。少年、また会おう。」

俺はレポートして合流しに行った。

・
・
・

そこではカカシとイタチが対峙していた。

「あれ、邪魔したかい？」

「「「！」「」「」

「遅いぞ羅刹。どこに居た？」

「ごめんごめん。腹減ったからラーメン食べてきた。けどそこで探しも見つけたぞ。」

「探し物・・・？何だ・・・それは？それからお前は誰だ？」

カカシが聞いてきた。

「俺は羅刹。イタチ、鬼鮫、どうする？ 殺^{やる}か？」

俺の言葉でカカシたちが身構える。

「・・・いいだろう。だが、早くすませろ。」

「サンキュー。」

・・・さあて、楽しめますか。

戦闘（前書き）

初戦闘です。さらにオリジナル術から新しいの dash ます。 . . . 文
才欲しい

戦闘

「羅刹、さっき探し物を見つけたと言っていたが、どこで見つけた？」

「ああ、一樂って言うラーメン屋。けど厄介なことにお守にあの自来也がついてる。」

「ほう。あの伝説の三忍の自来也ですか……。厄介ですねえ。」

「それにどこかに移動するみたいだから、先に探しててくれない？」

「お前一人で全員倒すのは無理でしょう。どうする気ですか？」

「適当に遊んでただけだよ。すぐに追いつくから。」

「…行くぞ鬼鮫」

「仕方ありませんねえ。くれぐれも捕まらないで下さいよ。」

そう言くと、イタチと鬼鮫は移動した。……さてと……俺は力カシたちの方を向き、構える。

「さっきも言ったが、俺の名前は羅刹だ。頭の片隅にでも置いといてくれ。」

「そんな必要はねえよ。お前はここでとっ捕まえてやる。」

アスマが強気な発言をする。

「それはあの二人が居なくなっただからかな？だとしても愚かな考えだな。」俺は殺気とチャクラを放出した。それを感じた上忍たちは構えなおそうとするが、遅い！！

「水遁 シブキセンボン
飛沫千本」

周りの水が千本の形になり、相手を襲う。俺の放った水の千本は、なかなかの速さをほこっているが、カカシは写輪眼により見切り、アスマはアイアンナックル・紅は苦無で弾いていく。俺はさらにたたみかけるために接近し印を結ぶ。

「風遁 真空波」
ダンゾウが使っていた忍術である。しかし、

「風遁 風塵の術」
アスマの術で相殺された。さらに、これで終わらず木が俺の体に巻きついてきた。幻術か・・・

「これで終わりよ！」
紅が木から現れ、そのまま苦無で俺のことを串刺しにした。しかし・・・

「おしかったね。」

「「「！！！？」」」
勝利を確信していたカカシたちは、背後から響いた俺の言葉で振り向き、俺は真ん中にいた紅を蹴り飛ばし、さらにレポートでアスマの背後に回った。そしてそのままアスマを苦無で斬りつけた。

「さて残りはお前だけだ。」

俺は最後のカカシと対峙し、駆けだした。

カカシ side

何なんだあいつは？羅刹とか言うあの男はかなり強い。しかし、今までビンゴ・ブックでも見たことが無い。いったいどの里の出身何だ？そんなことを考えていると、羅刹は一瞬で俺たちの背後に回った。

！！？？何だ今のは！？時空間忍術か！？それにどうやって紅の幻術を解いた！？しかし戦闘中のため長く考えることはできない。

（この戦い、長引けばこちらが不利だ！）カカシは短期決戦をしようとしているが、はたしてどうなる・・・。

その後

俺は今カカシと戦っている。やはりカカシは強い。俺も結構チートだが、写輪眼もかなりチートだ。うかつに術を見せたらコピーされる。

「やっぱ写輪眼はずるいだろう。それはチートすぎる。」

「その割には、全然困っているようには見えないけど。」

お互い攻撃をしながらの会話。けっこう大変・・・お、カカシの右手が光ってるから千鳥だな。そんなことを考えつつ、おれはオリジナルの術で抵抗する。

「雷切!!」 「風遁 砂塵刀!!」

砂塵刀はサスケの使う千鳥鋭槍の風遁版だ。結果、俺はカカシの雷切をやぶり、右わき腹を斬り裂いた。

「ぐっ!!ここまで強いとは・・・!!」

「まーね。それじゃ、俺もそろそろ二人と合流しますか。」
カカシにとどめを刺そうと近づいたとき・・・

「木ノ葉剛力旋風!!」
蹴り飛ばされた・・・因果応報?

「・・・あんた誰?」

「木ノ葉の気高き蒼い猛獣、マイト・ガイ!!」

「……いや、あんた猛獣じゃなくて珍獣じゃね？」

「気をつけるガイ！こいつは強いぞ！！」

「安心しろ。これ以上やり合う気はないよ。じゃあな。」

俺はそのままテレポートして、イタチたちと合流し、アジトに帰った。

「羅刹お帰り。」「ソロソロ賞金首ヲ狩リニ行クゾ。」

帰ってきたらダブルゼツに話しかけられた。確かに最近賞金首を狩ってないから運動不足だったが、この前の木ノ葉で戦闘を行ったため、勘が戻ってきたし、人柱力も狩りたいところだ。

「ゼツ、俺らのノルマって何？」

「俺たち八五尾ダ。」

原作でもほとんど出てこなかったからよく分からないが、なるようになるか……………

出会い

俺は今アジトに居る。ほんと五尾を狩りに行きたいところだが、まだ準備ができていないので、賞金首を狩ることにした。ちなみに紅の幻術は、原作で知っていたので気付かれないよう自分の爪を手のひらに食いこませたのだ。

「それじゃ、俺はまた賞金首を狩ってくるよ。」
ペインにそう伝える。

「気をつけるよ。」

そんなやり取りをして、今は短冊街にいる。綱手と出会う街だ。ナルト達と出会う前にちよつかい出しと思うてまあす。そしてらトントン発見!!!!

「ブキーーー!?!」

さすがシズネが飼っているだけあって忍犬並みに速い。しかし・・・

「捕まえた——」

俺よりは遅い。ジタバタ暴れるので縄でしっかりと縛る。

「さーて、どんな風して食べようかなー」

自分が調理されるのを聞いて暴れるトントン。しかし無駄である。

「やはり焼き豚か、いやチャーシューも悪くはないな。」

「ちよつと待ったアーー!!!!??」

後ろから声が聞こえたので振り向くと、シズネがものすごい勢いで走ってきた。

「何だあんた？」

「トントンを返して下さい!!」

「トントン？これは俺の食糧だ。」

「違います!!私のペットです!!」

「豚はペットとしているのではない、食べるためにあるのだ!!」

「カツコつけてないで返してください!!」

その後、結局話し合いでは解決せず、綱手と戦うことになった。
・・・なぜ??

「まさか伝説と戦うことになるとは・・・」

「ほう、私のことを知っているのか？」

何か得意げな顔してる。

「あんたは有名だからな。伝説の年齢詐称士さんよ。」

「貴様殺すぞ!!!」

ほんとのことなのに切れてる。ああ言う人にはなりたくないなあ。
シズネは後ろでアヒーーーーーて奇声をあげてる。静かにしろよ。

「まあいい。早く殺^やるかあ・・・」

「貴様、無事でいられると思うなよ・・・」

何か綱手が切れてるが、問題無い。綱手は一瞬で俺の頭上に移動し

た。

「痛天脚!!」

単純な踵落としだが威力は桁違い。地面が割れるって何よ……しかし遠距離からなら問題ない。

「水遁 水柱の術!」

地面から大量の水が噴きあがる。綱手はそれを避けながら接近してくるが、その前に広範囲の術で攻撃する。

「水遁 大瀑布の術!」

再不斬も使っていたこの術は威力が大きし範囲も広いから使いやすい。しかし綱手は真っ向からこの術を破った。ほんとに人間か?

「すげえな……あんた人間か?」

「若造ごときに負けるか!!」ならば、

「口寄せの術!」

神からもらったエンペラークロウのキッスを呼び出し、その背に乗る。

「ここまでは来れないだろ。それじゃ、雷遁 落雷!」

その名の通り大量の落雷が綱手を襲う。綱手は避けながら印を結んでいる。

「口寄せの術!」

……まさかカツユまで出すとは。

「行くぞ、カツユ!!」

「はい!!」

まずいなあ、まあしかたないか

「悪いがここまでだ。」

「何い!?!」

「これ以上やればお互いただでは済まない。悪いがひかせてもらおう。」

俺は印を結び（ほんとは必要ないが）テレポートで逃げる。

さて、これからは原作始まるまでおとなしくしますか……。

出会い（後書き）

次から原作に入ります。これからよろしくお願いします。それと編集しました。亀7さん、指摘ありがとうございます。

原作開始（前書き）

今回から原作スタートです。五尾の戦闘はオリジナルですので温かい目で見てください。

原作開始

さて、前回説明したが今回から原作スタートします。省略しすぎなのは勘弁ね。

「さて、準備も終わった。全員ノルマを達成してもらおう。」

「了解。じゃ、俺はそろそろ行くわ。」

俺はそう言つとアジトを後にし、岩隠れに向かった。……………

「さて、岩隠れに着いたし、五尾を探すか……………」

しばらく探すと、里からかなり離れた森の中で、それらしいチャクラを感知できた。おそらくこれだ。

「何だ貴様？」

「曉だ。お前の中の五尾を貰っていく。」

そしてすぐに戦闘が始まった。人柱力のハンは岩隠れの忍だから土遁を使うだろうし、原作ではほとんど出てこなかったが、イルカと馬を合体させた姿からして、おそらく水遁も使えるだろう。だが、俺には問題ない。

「風遁 大突破！」

「土遁 土流壁！」

俺の風遁を土遁で防いだハンは接近戦を仕掛けてきた。ハンの右ストリートを躲し、勢いを殺さず回し蹴りを叩き込むが、上手く肘でガードされる。そのままハンは左足で蹴りをするが俺はその力を利用して距離を取った。そのまま印を結び反撃する。

「風遁 真空玉！」

幾つもの風の弾丸がハンに飛んで行く。印を結ぶことができなかったハンは躲が幾つかがあたり傷を負う。さらに俺はたたみかける。

「雷遁 雷虎砲らいこぱう！」

これはオリジナル忍術だ。虎の形をした雷がハンを襲うが、かろうじて躲した。だが想定内だ。

「雷遁 白雷びやくらい！」

某死神漫画の技の一つだ。威力はそんなに無いがかなり速いため、ハンハンの左腕を貫通する。

「！！うぐう！やはりかなり強い。仕方がない……。うおおおおお！！！！！！」

ハンが吠えると、その姿が巨大化し、完全な五尾の姿になった。

「初めて尾獣を見るが、こりやすげーな……」

いかん。見とれてる場合じゃない。五尾となったハンは、そのまま俺に体当たりを仕掛けてきた。単純な攻撃だが、喰らったら死ぬな。

「だが、これでやっと本気が出せる。ありがとよ！！」

そう、俺が神から貰った最大の力、暴遁がやっと使える……。！！

「初めての相手には最高だ！！喰らえ！！暴遁 大嵐の術！！！！」
その瞬間、術を喰らったハンを中心に、森が消滅した……。

「おいおい……。自分で言うのもあれだが、何つつ威力だよ……。」

その言葉通り、およそ直径200メートル程森が消滅していた。ま

るで巨大な隕石が落下したみたいである。

「ドウヤラ終ワツタヨウダナ。」「でも凄い威力だね。森が吹っ飛んでるよ。」

「ゼツか。五尾は任せるぞ。俺はこのまま賞金首を狩る。」

「アア、ワカッタ。ダガ封印ハ全員イナケレバ出来ナイカラ、早く帰ッテコイ。」「気をつけてね。」

興奮冷めぬ俺はそのまま賞金首を狩り、金を稼いだ。余談だが、角都が俺と飛段を比較したせいで飛段と喧嘩した。まあこの二人とは一緒に行動してアスマと会うつもりだったからちょうどいい。デイダラとサソリも動いているからナルトにも会える。楽しみだ・・・

原作開始（後書き）

大嵐の術は水・風・雷を均等に合わせて、ワンピースの熊のウルスス・シヨック衝撃と同じ要領で使います。他にも暴遁はチャクラの比率を微妙に変えることで、全く違う術になります。

再会（前書き）

ここで当面の目標を出します。

再会

さて、五尾も封印したことだし、目標を確認するか……。え、今まで書かなかったのはなぜかって？ぶっちゃけ忘れてた。……と言っわけ俺の当面の目標はアスマを生かすこと、第四次忍界大戦まで生きること、ナルトにちょっかい出すことである。原作のアスマの死はとも残念に思っていたから阻止したいし、穢土転生されるのは嫌だから生きて戦争に参加したい。ナルトに対するちょっかいは何をしようか考え中。

「そしてただいま、サソリとデイダラが我愛羅を捕獲しに行っている。」

「羅刹、誰に話している？」
イタチに突っ込まれる。

「いや、ただの状況確認。それより少し外していいか？」

「どこへ行く？」

「ちょっと散歩。適当に帰ってくるから気にすんな。」

そうして俺はアジトを後にした。さて、ナルトたちに会いに行きますか……

しばらくすると、チャクラがかなり速い速度で移動していることが感知できた。方向からして砂に行く前だな……。……にやあぁ……。……
羅刹は他人が見たら絶対引く笑みを浮かべた……

「久しぶりだな、少年。いや、うずまきナルトか。」

「お前はあの時の!!」

カカシが驚いている。まあ一度しか戦ってないしな。

「我愛羅を返せつてばよ!!」

ナルトがキれているが、ここは軽く流そう。

「俺に言われても困るな。お前ら人柱力を捕まえることは、俺たちの任務だからな。文句があるならリーダーに言え。まあ、会えたとしても意味はないだろうがな……。」

「ふざけたこと抜かしてんじゃねえ!!! 我愛羅はぜってえ取り戻す!!!」

「けっこうけっこう。まあがんばれ。また会おう。」

そのまま俺はレポートしてアジトに戻った。そこにはすでに我愛羅を捕まえたサソリとデイダラがいた。

「遅えぞ羅刹!! 早く準備しろ、うん!!!」

デイダラに怒られた。仕方ないな。

「ごめんごめん、それとリーダー。」

「何だ？」

「砂の応援として九尾の人柱力が派遣されたよ。」

「……何故知っている？」

「散歩してたら会った。」

「……何故捕まえなかった？」

「俺のノルマは達成されてるし、ほかの奴のノルマの邪魔はしたくなかったから。」

「……そうか。まあいい、始めるぞ。封印術・幻龍九封尽!!」
さて、この術は三日三晩やらなきゃなんないからしんどいな……

そして三日後……

「木ノ葉カラノ応援ダ。二小队キテイル。」

「俺も感知で気付いた。両方知ってるチャクラだ。」

「羅刹、どんな奴らだ？」

「片方は九尾の人柱力うずまきナルトとはたけカカシ、それに砂のチヨ。もう一方は木ノ葉の上忍で体術を使う。見た目は珍獣だ。」

「珍獣？何ですかそれは？」

鬼鯨が聞いてくる。原作と違って会ってないからガイを知らないんだよな。

「そうとしか表現できないな、あれは。気になるなら見てみるよ。」

「まあいい。足止めを行う。サソリ、生贄を出せ。」

「簡単に言っなよ。俺の部下だぜ……。」
サソリが肩を落としている。それもそうか。

「サソリ・デイダラ、人柱力と会話したいから、少し時間くれ。」

「会話って何すんだ？うん。」
デイダラに聞かれるので軽く濁す。

「何、ちよつとした個人的な会話だよ。」

「ノルマの邪魔はするなよ。」
サソリに釘を打たれるが、気にしない。

「我愛羅！！」
しばらくすると、ナルトたちが来た。原作とちよつと違うが、まあいいか。

「！？てめえ！！」

「また会ったな。残念だが、我愛羅はもう死んだぞ。」

「嘘をつくな！！そんなの信じられるか！！」

「嘘について何の得がある？忍ならもつと冷静に判断しろ。」

「何で・・・何でこんなことするんだよ！？」

「何でって、それが俺たちの任務だからだ。お前も忍なら分かるだろ。上が決定したことをこなすことが俺たちの役割だ。いちいち感

情を入れるな。それでは忍とは言えんぞ。」

俺の話を力カシやチヨは黙って聞いている。この二人は俺の言葉の意味を理解しているからだろう。

「そんなこと知るか！！俺は認めねえ！！我愛羅は生きてる！！」

「そうか・・・お前は忍じゃない。ただの餓鬼^{ガキ}だ。」

「ンだとコノヤロウ！？」

「ナルト！！奴の言葉に耳を貸すな！！」

力カシが進言するが、ナルトは聞いていない。頭に血が上りすぎている。

「お前の言っていることは餓鬼の戯言だ。現状を理解しようとせず、己の意見を押し通そうとしているただの餓鬼だ。次に会うときは、もう少しまとともに成ってもらいたいものだ。サソリ・デイドラ、時間掛けさせて悪かったな。」

俺は話すだけ話して、その場を後にした。さて、久しぶりに一楽でも食べに行くかな・・・

木ノ葉にて

ただいま木ノ葉の一楽にいます。ちなみに結界とかに気づかれないのは俺のテレポート用のマーキングを施しているからだ。マーキングをしている場所には瞬時に移動できるからありがたい。

「へい！味噌チャーシューお待ち！」

個々のラーメンは二回しか食べたことないが、やはりおいしいな。さて、木ノ葉に来た目的を確認しておこう。

我愛羅編が終わって少しすれば飛段と角都と激突することになる。その原因の地陸を俺が殺してもいいが、そうするとあのゾンビコンピの情報が手に入らなくなる。ここらへんは原作どうりにしつつ、アスマを生かさなくてはならない。大変だが、それもまた楽しいものだ。俺がここに居るのは、どうやったらアスマを生かすことができるか考えるためだ。

「さて、腹ごしらえも済んだし、行動するか。」
俺はそうつぶやくと、一楽を後にした……

人目のつかない森の中で、俺は考える人のポーズをとりながらいくつかの方法を考えてみる。
？『飛段ではなく俺が戦う。』
これはあんまり好くないな。そうするとシカマルが飛段を倒すことができないなる。

？『ギリギリのところで止める』

これは難しいが、最悪これでいい。

？『治療する』

「……これ良くない？原作では治療忍術では治せなかったが、あの術なら何とかなるかもしれない。その術とは、綱手の創造再生である。あの術は大量のチャクラを使って細胞分裂を行う忍術だったが、俺の雷遁で代用できるかもしれない。雷影の雷遁の鎧は体に雷遁を流し、体の動きを活性化させる術だ。ならば、それを細胞に雷遁を流すことで細胞を刺激し、細胞分裂を起こす……きたー！ー！ー！これいける！！治療は影分身使えば何とかなるな！！ならば早速新術開発だ！！」

さて、簡単に言ってみたがどうしよう？……あ。そうだ、綱手やシズネに聞いてみるか。この前みたいにトントン拉致って、話し合いをしよう。ならこの服脱ぐか。

そしてただいま、シズネと向かい合ってます。ちなみにトントンは縛って木に吊るしています。

「貴方はあの時の！！またトントンを攫ったんですか！？」

「違う。俺はこの前逃した食料を確保しただけだ！！」

「だからトントンは食料ではありません！！！」

「ではこうしよう。俺は今新しい医療忍術を開発中だ。その手伝いをしてくれ。もちろん術が完成したらあんたにも教えるしこの豚にも手は出さない。」

「分かりました。とりあえず、どんな術なんですか？」

「雷遁のチャクラを細胞に流し、細胞分裂を起こして傷を治す術だ。」

「な！？人間の細胞分裂の回数は決まってるんですよ！？そんなことをすれば寿命が縮んでしまう！」

「しかし、通常の医療忍術では死んでしまう傷を治せるようになる死ぬよりはずっといいと思うぞ。」

「・・・分かりました。しかし、その術が完成したら必ず教えてください。」

こうしてこの術の開発が始まった。

最初は傷をつけた動物を治すことから始まった。これは基礎なので早く終わったが、この術は難しい。細胞分裂を起こすためには、傷を負った場所にチャクラを均等に流し込み外部から治す指令を出す必要がある。相当なチャクラコントロールと集中力が必要になってくるし、完全に治すことはできないかもしれない。しかし、これなら即死は防げるな。

修業が始まって二週間たち、この術もだいぶ完成してきた。ほんとは完璧にするつもりだったが、そろそろあの二人と合流しなくては。完成まであと少しですね。」

「いや、実はそろそろ戻るよう言われているんだ。ここで終わりがな。」

「そんな、あと少しなんですよ?」

シズネが残念そうに言うが、しかたない。

「申し訳ない。できればあなたがこの術を完成させてくれ。」

俺はそう言い残すと木ノ葉を後にした。なお、俺が暁だと知って、シズネの絶叫が木ノ葉中に響いたという……。

ついにその時1

「ただいま飛段・角都と一緒に行動してまゐす。」

「・・・誰に話しているんだ羅刹？」

角都が変な目でこつちを見てくる。そんな目で見られると凹むからやめて・・・

「いや、ただの現状確認だ。それよりどこに向かつてるんだ？」
原作で知っているが、知らないふりをしておく。

「着いたぞ、ここだ。」

「ホントにこんな寺に人柱力が居んのかよ？」
飛段が愚痴をこぼしている。

「火ノ寺か・・・。確かにここなら可能性はあるな。」

「その通りだ。」

俺の言葉に角都が相槌を打ち、寺の門を破壊し侵入した。

俺たちの姿を見た修行僧たちは驚いている。・・・結構相手が驚いてたり、脅えてたりする姿を見るのは好きだな。なんだか体が興奮してくる。・・・しばらくすると、中央から一人の僧侶が出てきた。あれが地陸か・・・。

「おいおい、また何とも徳の高そうな奴が出てきたぜ。」
原作どうりの飛段の言葉。感動しながらそれを表情に出さず、俺は

しゃべり出す。

「それだけじゃないぞ飛段。あいつはこちら側のビンゴ・ブックでは3000万両の賞金首だ。」

「その通り。あの賞金首は火の国の大名を守る守護人十二士にも選ばれたことのあるエリート忍者だ。あの火の国の紋が入った腰布がその証だ。」

角都がしゃべり終わったので、俺がしゃべりだす。

「さらにここ火ノ寺は、火の国に火ノ寺ありと呼ばれるほどの忍寺だ。僧侶は皆、仙族の才」と呼ばれる特別な力を操るらしい。氣い抜くと死ぬぞ。」

「その通りだな。」

「だから俺にそれを言うかよお前らあ!!」

飛段がしゃべると同時に俺たちは駆け出した……。

・
・
・

20分後、戦闘を終えた俺たちは休憩をとっていた。なかなか強かったな、あの坊主。アニメの仏と仁王を合体させたような術には手を焼いたが、遠距離からの攻撃には弱かったな……。

「どうやらここには人柱力はいねえみたいだな。儀式が終わり次第、次に行こうぜえ。」

つつかそんな状態で話すなよ!!子供が見たら泣くぞ!!

「いや、まずはこれを金に換える。まずは金だ。」

嬉しそうな声で話す角都。ほんとに金好きだよなあ……

「なら遅れないように速く移動しよう。口寄せ・三羽鳥!!!」

俺はそう言っているとエンペラークロウを口寄せした。ちなみに最初にもらったやつ以外はここで生まれたカラスたちだ。二羽とも体が大きくかつこいいな。

「俺の口寄せ鳥だ。こいつの背に乗れば早い。」

「なるほど、こいつら飛段よりも賢そうだ。」

「ちょっと待てえ角都!!! てめえ何言いやがる!!!」

飛段が角都に食って掛かるが、角都も俺も軽く流している。

「うるさいぞ飛段。お前は乗らないのか? なら置いてくぞ。」

ほんとに置いて行こうとしたら飛段が慌てて弁解した。

「おい羅刹!!! 乗らないなんて言ってねえぞ!!! だから俺も乗せてくれ!!!」

……そんなやり取りをしながら空の上……

「二人とも、カステラ食べるか? お茶もあるぞ。」

「……なんでそんな物がある?」

角都の頭に? が見える。それもそうか……

「前にこうした時何か食べるものがあつたほうがいいと思ってなで、いるか?」

「……いる。」

「俺にもくれ！あと茶は何だ？」

「緑茶と玄米茶だ。俺は緑茶だがお前らはどっちだ？」

飛段「俺は緑茶だ！」

角都「俺は玄米茶だ。」

そうしていると換金所に着いた。

「俺は金を数える。」

「俺は外に出てるぜ。」

「なら、俺は少しこの中を見学させてもらおう。」
それぞれバラバラに行動していると外が騒がしくなってきた。そろそろか・・・

「角都、敵みたいだぞ。」

「ああ、分かっている。」

外に出てみると、飛段が刺されていた。刺されてんのにしゃべってる光景はなんかシュールだな・・・

「飛段、お前刺されすぎ。本当なら死んでんぞ。」

「「「「「！？」」「」「」

俺の言葉で全員俺のほうを向く。

「！！お前確かあの時の！名前は確か羅刹！！」

アスマが吠える。

「おい羅刹！！角都はどうした？」

俺は指をさして教えてやると、土遁・土矛でシカマルを攻撃する角都がいた。そしてアスマが二人の間に立ちふさがる。

「角都！羅刹！！手え出すなよ。こいつはおれの儀式用だ！！」

「了解。手え出さないけど死ぬなよ。」

さて、まず一つ目の目標であるアスマを生かすは、どうなるかな・・・

ついにその時2

「口寄せ・日常品!」

俺は口寄せで畳とちゃぶ台を用意する。

「……お前は何をしている?」

また角都が頭に?を出している。それよりその呆れた目で見るな! なんか俺がバカみたいだろ!!

「飛段の儀式が終わるまで暇だからな。ちゃんと茶菓子にお茶もあるぞ。今度のは煎餅と饅頭だ。いらないのか?」

「……いる。」

そんな俺と角都のやり取りを見て、木ノ葉の連中は話し合いを行っていた。

「なんかあいつらのんびりしだしたぞ。」

「そのほうがありがたいっすよ。こっちはあの不死身野郎だけで手に余っちゃう。」

「しかし、警戒を怠ることはできないな。」

「おい角都に羅刹!! おめえら何のんびりしてやがんだ!!」
飛段が吠えている。

「お前が手え出すなって言ったから、俺ら暇なんだよ。」

「その通りだ。」

「ち、俺の分も残しといってくれよ・・・」

「そんなものは必要ない!!!」

俺たちの会話の中にアスマが入り込んできた。人の会話に勝手に入ることは失礼なんだぞ。

さて、今の状況を説明すると、飛段が儀式を始めてアスマ自身が怪我をしたところだ。

「終わったな。飛段のあの術にかかれば間違いなく死ぬ。」

「そうだな。それに角都、今戦っている奴は3500万両の賞金首じゃなかったか？」

「その通りだ。飛段が仕留めたらすぐに金に換えるぞ。」

そんな会話をしていたら、シカマルが飛段を図の外に引きづり出そうとしていた。

「へえ、あの小僧術の特性に気づいたんだ。」

「そのようだな。飛段がやられたら、俺たちも参加するぞ。」

すると飛段は首を切られ、木ノ葉の連中は一息ついていた。しかし・

「おいお前ら!!!なんで手をかさねんだ!!!」

首がしゃべり始めて全員が驚いていた。

「お前が手を出すと言ったんだ。それにそんなこと言ってられる状況か？」

「羅刹の言う通りだ。これからは俺たちも参加する。」
角都の言葉に相手は身構える。

「その前にそれを何とかしようぜ。生首がしゃべるって定番すぎて笑えねえよ。」

「んだと羅刹！てめえやんのか！！」

「角都、それ貸して。」

「……さつさと終わらせろよ。」
角都から首を借りると、そのままジャイアント・スイングしてやった……

「羅刹、悪かったな……」
すぐ気持ち悪そうな顔をして飛段が謝った。それでいいんだ。

「遊ぶのもいい加減にしろ。羅刹、首をくつつけるから体を持ってきてくれ。」

「了解。」

そう言つとアスマのところに移動し、アスマを蹴り飛ばして体を確保して角都のところへ持つていき、体と首をくつつけ地怨具で治していく。

「ふう、やっとくつついたぜ。つつか羅刹！！何しやがんだ！！すげえ気持ち悪かったぞ！！」

飛段が恨み言を言っているが気にしない。

「そんなことよりさつさと仕留めるぞ。賞金首はお前がやれ。」
角都の言葉で俺たちは動き出した。

「イズモ!!」

「分かつてる!!」

原作通り武器を出したコテツとイズモがこちらに向かってきている。原作通りに事が進んでいる。やっぱ介入すんのは楽しいな。

「接近戦をするつもりか？悪いが付き合う気はないぞ。水遁・水柱の術！」

綱手戦でも使った術だ。これにより前にいる二人はうかつに動けなくなつた。さらに畳み掛ける。

「水遁・水大蛇!!」
みすおろち

水柱が大蛇となって襲い掛かる。辛うじてよけた二人を、角都の地怨具で飛ばしてきた腕につかまり動きが止まつた。そして振り返ると、飛段がアスマにとどめをさしたところだつた。

「アスマ————!!!」

シカマルの悲痛な叫びが響く。するとすぐに俺たちの視界がカラスに覆われた。

「ち、増援か。」

「賞金首は逃がさん。」

一触即発の空気が漂う中、頭の中にペインの声が流れてきた。原作同様、二尾と三尾の封印のようだ。

「行くぞ二人とも。」

「あのリーダー、今度呪ってやろうかな。」

「そんなこと言うなよ飛段。てか角都、あの賞金首に死なれんのも
すくない？」

「なぜだ？」

「ここで死なれたら3500万両が無くなる。それより生かしておいて、後でまた殺したほうが得じゃね？」

「しかしあの状態から治せるのか？」

「最近開発中の術を使えばね。影分身使うから遅くはないし。」

「……ならいいだろう。俺も大金を逃がすのは嫌だからな。」

そして俺は影分身を残し、二人の後を追った……

Side
影分身

シカマルタたちがアスマを中心に集まっている。驚かしてやろう。

「なんだまだ生きてたのか。しぶとい奴だな。」

┐
┐
┐
┐
┐
┐
┐
!
?
?
┐
┐
┐
┐
┐
┐

全員驚きながらこちらを見ている。そのまま俺は歩き出す。

「貴様止まれ!!!」

全員敵意むき出しだが、気にせず俺はしゃべりだす。

「俺は影分身だから意味ないぞ。それよりそいつ、助けてやるよ。」

俺の言った言葉で全員が固まる。さっきまで敵だった奴の言葉とは思えないのだろう。

「何！！？ふざけんな！！そんな言葉信じられるか！！！」
案の定、シカマルを除く奴らからの厳しい言葉かし・・・

「いや、やってもらおう。」

「「「「「「「「！！！！！！」」」」」」」」

シカマルの言葉に全員が驚いた。

「ちよつとシカマル！！！！あんた何言つてんの！！！！」

「騒ぐなイノ。お前もアスマがもうだめだと分かってんだろう。それなのに敵であるこいつがとどめを刺すためにこんなことを言っているとは思えない。おそらく本当に治療するつもりだ。もうアスマが助かるにはこいつに賭けるしかねえんだ！！！」

シカマルのその言葉で静かになった。そして俺は印を結んで術を發動させた。

「雷遁・雷神体活性！！！」
らいじんたいかつせい

雷遁のチャクラを全身に流して細胞を刺激し、細胞分裂を起こさせた。これにより皮膚の傷は瞬時に癒え、内臓の傷も六割は癒えたので死ぬことはなくなった。

「これで死ぬことはないが、安静にすることだな。じゃあな。」

「待て！！！！」

そのまま消えようとしたらシカマルに呼び止められた。

「何だ？」

「何でアスマを助けた？俺たちは敵なんだぞ。」

どうやら理由が気になるようだ。そこで、ウソとホントを織り交ぜて話してやった。

「そいつは高額の賞金首だ。だから後で殺したほうが金になる。それに俺もそいつと戦ってみたいからだ。」
それだけ言ったら俺は消えた。

さて、これからどうなることやら……………

再戦（前書き）

遅くなつてすいません。

再戦

あれから6日たち、三尾の封印を終え二尾の封印をしている。

「もうすぐ二尾の封印も終わるな。」

「やっとかあ。6日もじつとしてたから体がなまっちまったぜ。」

「二人とも、封印が終わり次第木ノ葉に向かうぞ。」

俺・角都・飛段が会話しているとデイダラが話しかけてきた。

「お前ら木の葉へ行くんなら一つ忠告しとくぜ、うん。あそこにはうずまきナルトって人柱力がいる。そいつに遭ったら気を付けるこつたな、うん。」

「オイオイオイ！てめーと一緒にすんじゃねーよデイダラちゃんよオ！角都に腕くっつけてもらった弱輩もんが！」

「飛段、お前の首よりはマシだと思うぞ・・・。」

「その通りだな。」

「ってオイ！コラ、角都に羅刹！！てめーらはどっちの味方だ！？」

「どう考えたって腕より首の方がひどいだろうが。」
「当たり前だ。そんな会話をしていると封印が終わった。」

「では木ノ葉に行くぞ。」

「俺は少し遅れていくから。それと飛段。」

「あん？何だ羅刹？」

「惚れ、これお前のだろう。」

俺はアニメでは角都が持っていた額当てを渡した。

「おお！！俺の額当て！！サンキュー羅刹！！」

「それじゃ、また後でな。」

ここは原作通りに進めよう。

少し時間が経過したところで顔を出してみると、角都とカカシが戦いだそうとしていた。

「角都、俺も参加していい？」

「「「！？」」」

「羅刹か、構わないがカカシは俺がもらうぞ。」

「了解。そこの餓鬼ども、あの賞金首は生きてるか？」

「ほんとに答えるつもりなんかないけど、助けてくれたのはアンタだしね。先生は生きてるわよ。けど絶対先生を殺させはしない！！」

「その通りだ！！」

イノとチヨウジが吠えるが、もともと殺す気もないので適当に言い

返しておく。

「それは立派なことだな。だがあれは俺の獲物だ。必ず仕留めさせてもらおう。だが、まずはお前たちからだ。」
そして戦いが始まった。

俺は印を結び攻撃を開始する。

「水遁・水切り!!」

口から大量の水を勢いよく噴出し相手を切り裂くこの術はウォーターカッターと同じ原理だが、直線過ぎて躲かれてしまう。二人は苦無を投げつけ反撃をしてくる。俺は苦無の攻撃を避けながら印を結ぶ。

「水遁・水衝波!!」

アニメで二代目火影が使った術だ。大気に存在する水分やさつき使った水遁の水を利用し巨大な水の竜巻が完成する。それから放出水は破壊力が強いいため周りの木々薙ぎ倒しながら二人を襲う。

「超倍化の術!!」

チョウジがかなりデカくなり俺の水衝波を防ごうとする。しかし、

「うわああ!!」

「きゃあ!!」

その程度では俺の術は防げない。二人は吹き飛ばされチョウジは術が解ける。さらに俺は追撃を開始する。

「雷遁・感激波!!」

ダルイも使ったこの雷遁を水に流し、相手の動きを止めそのまま苦無で切り裂こうと近づくと背後から音が聞こえ、とつさに躲すと力カシが千鳥で攻撃してきた。角都を見てみると残りの仮面を取り込み、地怨具が体中から飛び出していた。・・・キモい・・・

「オレの心臓を2つも・・・久方ぶりだぞ・・・それは・・・。」

「角都、大丈夫か？」

「・・・これで、大丈夫に見えるか？」

「ううん、全然。」

「・・・それよりそろそろ終わらせるぞ。」

「りょーかい。」

ズツ角都の体から飛び出ている地怨具襲い掛かり、

「ぐっ!。」

「きゃっ!。」

「うわあ!。」

角都が三人を捕まえた。

「死ね・・・。」

そして、面で攻撃しようとした。しかし、

「!!!」

「風遁・螺旋丸!!」

「水遁・破奔流!!」

「颶風水渦の術!!」

水遁と風遁が合わさった術で相殺された。

「何か来たな。」

「遅くなって済まねーってばよ。」

「お前か、うずまきナルト。」

「・・・今度は、ぜってえ捕まえてやるってばよ。」

応援が来てしまったか・・・。こりや面倒だが、面白くなってきたな・・・。

戦闘開始（前書き）

更新しなくてすいません！大学の課題やら何やらで更新できませんでした！できる限り更新していきますので、よろしくお願いします。

戦闘開始

さて、原作通り第七小隊が来たか。しかし、今回は暗部も二小隊来ている。俺がいるせいで原作が崩れてきたな。まあそれはそれで面白いがな。

「久しぶりだなうずまきナルト。一尾のガキの時以来か？」

「ああそうだな。今度こそお前を叩き潰してやるつてばよ!!」

「それは楽しみだが、お前は角都の獲物だ。おれを叩き潰したいなら角都を倒すことだな。その間おれも暇だからその暗部どもでも相手にして待っててやるよ。」

俺の言葉と同時に戦闘が始まった。角都たちの戦闘に巻き込まれないように距離をおき構をとる。暗部たちは俺を囲むように陣を組んでいる。原作で見たペイン来襲の時の戦闘で分かるように、こいつらは個人の戦闘だけでなく連携も得意ときているから、今回も連携で俺を仕留めに来るだろう。ならばご自慢の連携ができなくなったら、どうなるかな？

「水遁 水柱！」

まずはこの術で陣を崩し次の攻撃につなげる。

「水遁 水大蛇！」

水柱が大蛇となって暗部に襲い掛かるが、暗部たちも黙ってやられているわけではない。

「土遁 土隆城壁!!」

二人の暗部が全員を囲むように土を隆起させ壁を作ると、さらに別の二人が攻撃を仕掛けてくる。

「火遁 豪火球の術！」

「風遁 大真空波！」

火遁と風遁が混ざり合いより威力を増して俺に迫る。しかし・・・

「水遁 アクアラゲナ 亜琥亜羅具奈！！！」

水が俺の前方に集まり巨大な津波となつて術を飲み込み、それだけでなく周りの森おも巻き込み破壊していく。この術は俺のオリジナルだ。某海賊漫画の津波を術にしたものだが、水が少ないせいで威力が弱い。だが多少はダメージは与えられたようだ。もちろん、ダメージが回復するのを待つてやるほど俺は優しくない。

「雷遁 感激波！」

この辺りはさっきの術で水浸しだ。そこに雷が落ちれば感電する。案の定、ダメージの大きかった二人は避けることができずもろに喰らってしまったため、ピクリとも動かなくなってしまった。

「貴様っ！！！！」

暗部どもが睨んでくるが、そんなことは気にしない。

ドゴオオオオオオン

！！！！！！！！

遠くから爆発音のような音が聞こえた。向こうは終わったようだな。

「さて、いい加減飽きた。お前らもう終わりたいいいよ。」

「！！！？ふざけたことを抜かすな！！！」

俺の言葉に暗部どもは激怒する。それもそうだが飽きたものは飽きた。これで終わりだ。

「怒るのは勝手だが、自分たちの周りをよく見てみな。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

暗部たちは怪訝な顔をしている。周りは少量の水しかない。これが何だというのだという顔をしている。

「お前らの周りにあるのは水だ。しかし、量が少なすぎるとは思わなかったのか？」

その言葉に暗部たちは息を飲みすぐに離れようとした。しかしもう遅い……

「水遁 蒸気地水牢！」

その瞬間空気中の水蒸気が一気に水に戻り、水の牢獄を作る。先ほどの亜琥亜羅具奈に使った水をゆっくりと水蒸気に変化させ、術を発動した瞬間に一気に水に戻したのだ。もっと周りを見てみればわかったかもしれないが……

「これで終わりだ。」

俺の言葉に暗部たちは何とか逃げようとするが、その程度ではこの牢獄は破れない。

「死ぬ。暴遁 乱鬼龍！！！！」

おれの手の中に発生した術は龍の形となり周りの森を破壊しながら

敵を噛み砕いた・・・。

これでこちらは終わった。さてと、戻りますか・・・・・・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3220v/>

暁万歳！！

2011年11月11日23時02分発行